山首上人さまご講演

十界（じゅっかい）

仏（ほとけ）の地獄心（じごくごころ）

龍舌蘭（りゅうぜつらん）

仏さまを困らせることのないように

十界

十界とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道と、声聞・縁覚・菩薩・仏界の四聖道をいう。

人はみな、この十界の中に住み、生きるものである。

たまたま教えを聞き、四聖道のよき行ないをしようとしても、その知ること浅きが故にまた凡夫にもどり、六道をはなれることができず、未来永劫、苦しみ悩むであろう。

真に仏の教えを聞き、学び、行ずることこそ、この世に幸福と平和をもたらすものである。

＝御開山上人御法話資料＝

「十界の絵図」を見ますと、中心に「心」と書かれていて、周りに仏界から地獄界までの有様が描かれています。

絵図の他に文字だけの物もあります。こちらは杉山先生の時代に作られた物で、大

切にされてきた教えでもあります。聞くところ杉山先生の直弟子と言われた祖父江先生が、いつも十界の話をされて〝同じ話を百ぺん聞きなさい〟と言われていたそうです。

実は『法音寺暦』の発行元、一天社の方が〝これはいい物だから、是非当社の暦に載せさせて頂きたい〟と言われました。断わる理由は何もありませんから〝どうぞ〟と申し上げたわけですが、それ以来表紙の裏に印刷されて、今では全国的に知られるようになったようです。多くの方に役立てて頂けたらけっこうなことと喜んでいる次第であります。

「心」が中心にあるのは、私共の心が十界の中を巡り歩いていることを現わしています。その時その時の心の状態によって、今自分はどこにいるか考えてゆくといいかも知れません。朝は穏やかに目覚めても、何かあれば腹を立て、貪り、愚痴を言うということで、ぐるぐるぐるぐる回るのです。ですから、よく目につく所に貼って置いて、自分を反省する材料にしてゆくといいと思います。

順番に見てまいりましょう。

「地獄＝怒りは病気の基」

怒ってばかりいると周りの人も困りますが、本人も体が酸性になって病気になりやすくなるものです。

「餓鬼＝惜しい欲しいは貧の基」

〝もっと欲しい、もっと欲しい〟という、満足しない心です。とにかく人間は欲が深いものですから、いつもあせりの心がついてまわります。衣・食・住のすべてに〝これはいいけどあれが足りない〟という、不足の心がぬぐい切れません。それではいくらお金があっても足りません。

「畜生＝愚痴と不足は不和の基」

思うようにならないことに出くわした時、気の強い人は腹を立て、そうでない人は愚痴を言うということになります。文句ばかり言っている人とは仲良くしたいと思いません。自然に人は遠ざかって行くでしょう。

「修羅＝喧嘩・口論禍の基」

人と争っていて、人生がよくなることはありません。「阿修羅」という有名な像があります。凛々しいお顔をしてみえますが、やはりどこか、憂いを含んでいるように見受けられます。終わることのない人間同士の争いを嘆いておられるのかも知れません。

「人間＝平凡に暮すは善悪の岐路」

普段は比較的穏やかに過ごしていても、

いざという時、いい方にゆくか悪い方にゆくかわからないというのが人間界です。また、何事も長続きしないという特徴もあります。嬉しいことはあってもその喜びが長く続くことはありません。苦しいことも、どんなに苦しいといってもいつまでも続くわけではありません。一時的なものですが、苦しいことは何故か大きく見えてすっきりしません。

人間界はちょうど善悪の真ん中、つまり、楽しいことと苦しいことの中間に立っていると考えたらいいでしょう。

「天上界＝喜びに満ちたる日暮しも永く続かぬ」

ご存知のように「天人」は羽衣を翻えして楽しそうに天空を舞っています。そんな姿を見ると〝いいなあ〟と羨しくなりますが、なぜか「迷いの六道」に入れられています。

天人が空を舞うことができているのは、過去に積んだ徳があるからです。その徳がなくなったら、ガソリンの切れた自動車と同じで、飛ぶ力をなくしてしまいます。その様相が、「天人の五衰」と言われていることです。

一、衣裳が汚れてくる＝私共のように洗

濯をしないのでしょうか。羽衣は、簡単に洗えないのかも知れません。

二、頭につけた花飾りがしぼんでくる＝花もやはり生物です。いつか枯れる時がくるものです。

三、体が臭くなり、四、脇の下に汗が流れる＝俗に言う「ワキガ」のようであるのかも知れません。

五、本座を楽しまない＝本座とは、自分の今いる所・立場です。今の自分を喜ぶどころか〝あれもないこれもない〟という、不平・不満の方が多くなるのでしょう。

忘れてならないのは、今の状態が必ずしもそのままということはないと考えてゆくことです。思うようにならないことはあっても、今を喜んでゆくことが大事です。

〝そんなこと言われても、喜べることなんかない〟と言われるかも知れませんが、こうして生きていること自体、大変ありがたいことなのです。目の見えること、耳が聞こえること、足があって歩くことができることなど、ありがたいことはいっぱいあります。それを喜べないのは〝あたりまえ〟という心が強いからです。この〝あたりまえ〟が心の土台にあるから、今の自分を喜ぶことができないのです。

「六道輪廻」と申しまして、私共の心はこの六道をぐるぐるぐるぐる回り続けているのです。朝起きた時は平穏な心でいても、テレビや新聞の広告でいい物が目に入るとすぐに欲しくなります。そして、それが簡単に手に入りそうにないとわかると腹を立てて、愚痴を言うということになります。一日のうちでもあっちへ行ったりこっちへ行ったり、落ち着きのないことこの上もありません。それで人生が良くなるとは思えません。

次は四聖道です。

「声聞＝聖の教えを聴聞するは仏門の入口」

お釈迦さまの教えを聞くことです。それがまず、幸せへの第一歩であります。

お話を聞いても右から左にすっと抜けてしまうかも知れませんが、まず聞こうとする気持ちが大事です。

「縁覚＝世の無常を悟るは自己の修行」

見たこと、経験したことによって悟りを開くことです

この世の中で一番確かなことは、生まれた以上必ず死ぬということです。子どもの頃、親はいつまでも生きていると思っていました。しかし、残念なことに亡くなりました。そこで〝この世はやはり無常なんだ〟

ということを知りました。これも一つの悟りと言えます。

すべて物・事は必ず、移り変わってゆくのです。それなのに、いつまでも変わることがないと思っているのでしょうか、いいかげんなことばかりしておりますが、人間は、生まれたという因縁によって必ず死ぬという、避けることのできない因縁を持っていることを忘れてはなりません。

私もこれまで年齢を重ねてきました。今振り返ってみると、現在生きておられる方より既に亡くなられた方の方が、細かく数えたらたくさん知っているかも知れません。別の見方をするとこれは、それだけ大勢の方のお世話になってきた、ということです。ボヤーッと見ていたら気付きませんが、毎日生活しているということは、それだけの因縁を頂いているということです。そうしたことの中で言えることは、いいことも悪いこともみな、悟りの種にできないことはないということです。そういう目で世の中の「無常」を見てゆきたいと思うのであります。

「菩薩＝智徳を磨くは仏の修行」

自分のことを考える前に、他の人のことを思いやってゆくことです。自分のできる

ことで、立場を通して仕事を通して、少しでも人の役に立つことをするのが菩薩の働きであり、仏となる修行であります。

「仏界＝一切の衆生を救う完全無欠は覚者なり」

仏さまという方は、とても私共には及びもつかないと思いますが、「十界互具」という教えがあります。私共のような人間界にいる者が、時に餓鬼の心、修羅の心を起こすように、仏さまにも地獄の心、畜生の心があるということです。

〝仏さまにそんな……〟と思われるかも知れませんが、仏さまでもやはり〝思うようにならない〟と思ってみえることはあると思います。この〝私〟のことを考えるとよくわかります。いいお話を聞いてもすぐ忘れてしまいますし、相も変わらずくだらないことを繰り返しております。徳を積むどころか、罪障を作ることばかりしております。そんな姿をご覧になったらさすがの仏さまも〝本当にまあ、困ったものだ〟と思われるに違いありません。仏さまが〝頭に来た〟と言って怒り出されるようなことはないと思いますが、それが「仏の地獄心」というものかも知れません。心してまいりましょう。